

教務だより

2012年7月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

「安全ゾーン」から「勇気ゾーン」へ

茗溪塾塾長 宇野 雅春

定期試験が迫っているせいで、いつもはオープンルームに来ないような生徒も、足繁く通ってくるようになります。提出が義務づけられている「学校のワーク」を早めに仕上げあくまでも100点を目指す勉強が成績アップのカギです。「この程度やったから」とか「このくらいで良いか」的な勉強では、成績アップは望めません。そんなこんなで、中3ともなれば、とにかく家で勉強できない生徒は塾に来ます。

「ハーっ」というため息が時々漏れます。「学校の先生の説明がわけわかんない!」とか、質問した問題がちょっとでも難しいと「なに、それ! 訳わかんない!」とキレています。質問されている方が、怒られているような構図になります。なだめながら懇切丁寧に説明をくりかえしますが、あちこち眼が動いていて聞いていないようにも見えます。

挙げ句の果て、「こんな勉強が世の中で、何の役に立つんだ!」と突然言い出したりします。「くだらない」勉強に精を出している人よりも問題の解けない、わからない生徒が偉くなります。「じゃあ、君は世の中で、何の役に立つの?」とやり返しますが、子供を説得できるところまでは行きません。親が子育てで汲々としているときに、子供は反抗期で「親がウザい!」と思っています。親にとってはこの子育ての最中は、相当な忍耐がいるときです。十分な衣食住が足りている中で、子供達が見ているのは、もっと上の楽々生活です。とにかく面倒なことはしたくない。自分一人ひっそりと暮らしていければいい。でも、ほしいものはたくさんあります。私から見れば、中学生の持ち物はとてもぜいたくに思えます。結局、恵まれれば恵まれるだけ、子供は駄目になっていくような気がします。人の心がわからなくなります。「我がまま」だらけなのに、自分が一番辛い思いをしていると、考えるようなのです。当然、自分を鍛えるということにも臆病になります。「受験」を出来るだけ苦労しないで乗り切ろうかとも考えています。と、現象面だけ見ていると、なんだか今の子供たちがとてつもないモンスターに見えてしまいます。

でも果たしてそれが本当のことなのでしょうか? 子供達は、本当はもっと頑張りたいと考えているのではないか? ただ、小さい頃から、保護され制約され満たされて長く来ているので、居心地の良い今の場所から抜け出せない事にいらだっているのではないか?

そうありたくないのになってしまっている自分に対する苛立ちが、今度は指導者批判になります。「だって、叱らないんだもん。」とか、「きびしくできないんだよ!」という言葉は、もちろんさげすみの言葉です。毅然と言ってくれない親や先生。「〇〇ちゃんにはそれはとても無理」とか「〇〇にそんなことできるわけが無い。」と子どもの伸びる芽を摘み取る大人たち。小さいときはそれで良くても、ある年齢に達すると、自分たちがそういう風に育てたのに「ダメな奴!」とレッテルを貼ります。そういうことにも、子どもたちはいら立っているのではないか?

いわゆる「安全ゾーン」から抜け出せないまま自分をダメにしていくことへの不安です。何か行動を起こすと言うことは「勇気ゾーン」に進むことです。チャンスはいくつもあります。最初は、誰でも尻込みします。何か新しいことをするときには、誰もが辛いのです。いい仕事をする人ほど、大きなプレッシャーにさらされ、ストレスの多い時間を過ごします。でもそれが必ず、成果を生みます。小さなハードルをよけながら、「楽しいこと」優先では未来が切り開けるはずありません。居心地のいい場所「安全ゾーン」から「勇気ゾーン」へ、この夏は生徒の一人一人に一步進めてほしいと思っています。